

活動4年目を迎えた 「生きるの教室」

—— 子どもたちに「がん」に対する正しい知識を伝える
日本のがん死亡率低減を目指して

Ikiru-no-kyoshitsu (School for a Better Life) Now in Its 4th Year of Educating Youths —Seeking to lower Japan's cancer death rate by giving teens a correct understanding of cancer



「生きるの教室」は、全国の中学2年生に対し「がん」に対する正しい知識や「生きることの尊さ」を伝える日本のバイエルの社会貢献活動である。がん教育に先駆的に取り組む東京大学医学部附属病院の中川恵一先生を講師に迎え、バイエルの社員サポートスタッフが授業補助担当として参加している。

2014年5月には、はじめて福島県を訪問し、福島大学附属中学校で開催。県庁関係者や報道関係者にも公開された。

Ikiru-no-kyoshitsu, a CSR program of Bayer in Japan, seeks to instill eighth graders with a correct understanding of cancer and a deeper awareness of the preciousness of life through lectures led by University of Tokyo Hospital's Dr. Keiichi Nakagawa, a leader in cancer education. The workshop was held last May at a junior high school attached to Fukushima University.

「がん」は知ることによって、リスクを減らせる病気

東京大学医学部附属病院 放射線科准教授／緩和ケア診療部長
中川恵一 先生

日本は世界一がんが多い国です。先進国の中でも、がんで亡くなる方が増えているのは日本だけという状況です。しかし、これほど身近な病気であるはずのがんについて、学校教育の中ではほとんど

教えてきませんでした。がんは、知識があるかどうかでその後のリスクが大きく変わる病気です。生活習慣に気を付けるだけで、がんにかかるリスクは半分から3分の1くらいまで減らせます。そして、仮にがんになった場合でも健診などで早期に見つけて完治させる、いわゆる二次予防が大切です。がんは怖い病気というイメージがありますが、いまや全体で6割近く、早期がんに限れば9割以上が治る時代なのです。

たとえば、大腸がんの検査は検便です。そんな簡単な検査を受けておくだけで、大腸がんで命を落とすリスクは、3分の1以下に減らせます。このように、ほんのちょっとした知識と行動で大きくがんは防げるにもかかわらず、定期的にがん検診を受けている人は、日本では2～3割程度なのが現実です。

子どもたちに「がん」に対する正しい知識や「命の大切さ」を伝える、日本のバイエル100周年記念企画「生きるの教室」は2011年に始まり、全国各地で開催を続けた結果、徐々に認知が広がってきています。そのような草の根運動にうながされる形で、昨年度から文部科学省も外郭団体でがん教育に関する検討委員会を作り、今年度は21の都道府県でモデル事業の予算をつけました。そして、今年度からは文部科学省の中でがん教育に関する検討会を立ち上げ、今回の学習指導要領の改訂で、保健体育の教科書に「がん教育」を柱のひとつとして取り上げる方向で検討が始まっています。

これから日本のがん対策は大きく変わっていくでしょう。そういう国の大きな方向転換のきっかけのひとつとなり、大変意義のある活動だと感じています。今、私が心配しているのは、親世代のことです。これからの子どもたちは、がんのことを習いますが、親はがんについてよく知らない…。ですから「生きるの教室」で学んだ子どもたちを通して、親御さんも逆世代教育としてがんを学び、ご自身の健康を守っていただければと思っています。



ど教えてきませんでした。

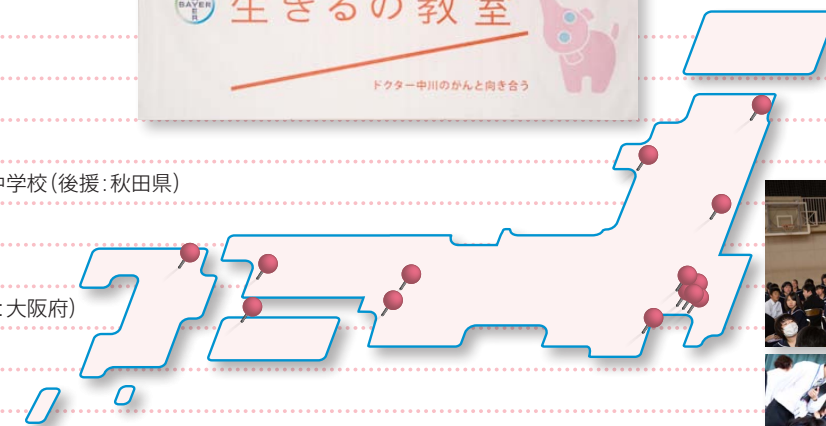
がんは、知識があるかどうかでその後のリスクが大きく変わる病気です。生活習慣に気を付けるだけで、がんにかかるリスクは半分から3分の1くらいまで減らせます。そして、仮にがんになった場合でも健診などで早期に見つけて完治させる、いわゆる二次予防が大切です。がんは怖い病気というイメージがありますが、いまや全体で6割近く、早期がんに限れば9割以上が治る時代なのです。

たとえば、大腸がんの検査は検便です。そんな簡単な検査を受けておくだけで、大腸がんで命を落とすリスクは、3分の1以下に減らせます。このように、ほんのちょっとした知識と行動で大きくがんは防げるにもかかわらず、定期的にがん検診を受けている人は、日本では2～3割程度なのが現実です。

子どもたちに「がん」に対する正しい知識や「命の大切さ」を伝える、日本のバイエル100周年記念企画「生きるの教室」は2011年に始まり、全国各地で開催を続けた結果、徐々に認知が広がってきています。そのような草の根運動にうながされる形で、昨年度から文部科学省も外郭団体でがん教育に関する検討委

全国に広がる開催校

東京都	葛飾区立新小岩中学校
東京都	江戸川区立葛西第二中学校
青森県	おいらせ町立木の下中学校
山口県	周南市立須々万中学校
愛媛県	愛光中学校
東京都	葛飾区立堀切中学校
秋田県	秋田大学教育文化学部附属中学校 (後援: 秋田県)
京都府	大谷中学校
栃木県	佐野日本大学中等教育学校
大阪府	柏原市立堅下北中学校 (後援: 大阪府)
神奈川県	鎌倉女学院
埼玉県	入間市立金子中学校
福岡県	飯塚市立穂波西中学校
福島県	福島大学附属中学校 (後援: 第52回日本癌治療学会学術集会/福島県立医科大学器官制御外科学講座)



「生きる」ということを、真剣に考えるきっかけにしてほしい

「生きるの教室」特別ゲスト 「ひいらぎの会」代表世話人
鈴木牧子 さん

今回、私は特別ゲストとしてがん経験者の立場からお話をさせていただきました。がんを学ぶことは「死」に対する意識にも関連する教育だと思うのです。日本人は、がんについてもそうですが、ネガティブなことを話すのはタブーだという意識があります。家庭でもそれを避けているという光景が見られます。しかし今回は、あえてそこに踏み込んで、子どもたちと一緒に話をしたことに意味があったと感じました。

子どもたちは本当に素直で、真剣に話を聞いてくれて、やはり感受性豊かなこの年頃に「死」やその裏返しとなる「人生を大事に生きること」について意識することは、とても大切な教育だと感じました。

グループワークでは「大切な人をがんで亡くさないために、自分は何ができるか」と

いうテーマで、それぞれが意見を出し合いました。そのなかで「祈る」というキーワードが出たグループがあったのですが、祈るという行為は、相手を心から思いやるということ。そこに思いが行き着いたのには感動しました。これは、宗教を越えた部分での人としての優しさがあふれ出た言葉に聞こえました。普段は受けたことのない授業だったにもかかわらず、活発に意見が交わされ、発表もとても良くとまっていたし、大成功だったと思います。

To learn about cancer is to think about death, and this subject tends to be avoided in many homes. Ikiru-no-kyoshitsu inspired the students to openly share their thoughts on this topic and how they could protect loved ones from cancer.



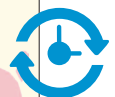
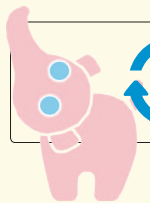
子どもたちの真剣な様子に、がん教育の重要性を再確認

「生きるの教室」後援 第52回日本癌治療学会学術集会／福島県立医科大学器官制御外科学講座
講師 中村 泉 先生

がん教育について何か関われないかと考えていたところ「生きるの教室」の授業を知りました。そこで「ぜひ、福島で」とお願いし、後援という形で協力させていただきました。

今回、初めて中川先生の授業を拝見し、子どもたちの反応が想像以上に真剣であったことに驚きました。やはり、こういった教育は、早い時期から取り組んでいくべきではないかと強く感じました。今、このタイミングで、福島で「生きるの教室」を開催していただけたことに、大変感謝しています。





こんな風に授業は進みます！ 「生きるの教室」のタイムスケジュール(110分)

🕒 レクチャー編 >> ドクター中川による講義

1 生きていることと向き合うためのセッション

・オリジナルムービー「いきるぞう～いのちの河のものがたり」の上映

2 がんと向き合うためのセッション

・がん検診啓発ムービー「がんちゃんの冒険」の上映

・がん経験者の体験談(特別ゲスト) & 中川先生とのトークセッション

・質疑応答

—休憩—

🕒 個人／グループワーク編

1 個人作業

「想起」・「喪失」・「希望」の3ステップで、大切な人をがんで失わないために自分は何ができるかを書き出す。

2 グループワーク

個人作業をもとに、班になってグループディスカッション

①②のあいだ、社員サポートスタッフは生徒たちのテーブルを回ってフォロー

3 話し合った結果を班ごとに発表

<生きるの教室の総括 & 質疑応答>

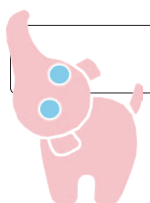
中川先生による総括と質疑応答

<終了>

「生きるの教室」で上映したムービーは、家で家族と話し合うきっかけにもらえるように、DVDを生徒たちに配布します。

…DVD「いきるぞう～いのちの河のものがたり」

…DVD「がんちゃんの冒険」



クラスの代表生徒を交え、ミニ取材会を開催



「生きるの教室」の終了後、生徒代表から中川先生への感謝の気持ちが伝えられ、引き続き、中川先生や中村先生、特別ゲストの鈴木さん、クラスの代表生徒を交えて、ミニ取材会が開かれた。ミニ取材会では、周りにがんの人がいてどうしたらいいか分からなかったけど、この日学んだことを活かしていきたいと感じたとか、がんについての意識が変わったので、両親と話し合おうと思ったなどの意見が発表された。



「生きるの教室」成果がカタチに… グループワークの発表コメント!!



免疫力があがるよう、
「笑う」「笑わせる」ように
暮らす!

両親を怒らせないように、
ストレスを溜めさせないようにする!

がんの知識を深め、
患者さんへの思いやりを持つ!

冷蔵庫のビールを
ノンアルコールに変えてしまう!



家族でがんについて
話し合いたい!

タバコを吸わせない!

大切な人が
がんにならないように祈る!



などなど…

今から生活習慣を見直す。
肉と魚のローテーション!



日本癌治療学会でも取り上げられた 「生きるの教室」

Japan Society of Clinical Oncology Spotlights Ikiru-no-kyoshitsu

「がんの教育・普及啓発」は、今年度見直された厚生労働省の「がん対策推進基本計画(2012年改定版)」にも盛り込まれ、現在、文部科学省の検討会の取り組みとして、医療関係者、教育関係者、患者さん、自治体を中心に、がん教育のあり方について模索が続いている。そんな中、2014年8月30日、横浜で開催された第52回日本癌治療学会学術集会のシンポジウムで、「生きるの教室」が先駆的な実践事例として発表された。

Ikiru-no-kyoshitsu was spotlighted at this year's Japan Society of Clinical Oncology annual meeting as a pioneering endeavor that responds to the MHLW's and MEXT's call for stronger cancer education and awareness raising.

がんを知るだけでなく、命の大切さも学んでほしい

バイエル薬品は2011年より東京大学医学部附属病院の中川恵一先生を講師に迎え、中学生を対象にしたがん教育「生きるの教室」に取り組んできた。これまでに受講した生徒数は、全国各地14校の中学2年生約1,700名。事前・事後アンケート結果では高い学習効果が示されており、学校、保護者、自治体関係者などから数多くの賛同と評価の声が届いている。

授業は堅苦しくせず、楽しく学べるようにと「生きるの教室」



東京大学医学部附属病院 放射線科准教授／緩和ケア診療部長
中川恵一 先生

昨年の日本癌治療学会学術集会のパネルディスカッションに「生きるの教室」の授業を受けた女子中学生がパネラーとして参加してくれました。これは前代未聞の画期的なことです。

そのとき、彼女は「中学生は大人が思っているほど幼くありません。がんを学び理解して、防げるも

のなら防ぎたいと考えています」と発言してくれました。また、「この授業をほかの人にも受けてほしい」とも述べていました。今、がん教育を学校の授業に取り入れるための仕組みづくりが急がれていますが、国や都道府県のがん教育の取り組みに、この「生きるの教室」の活動が少しでも参考になればいいと思っています。また、日本のがん教育を牽引してきた「生きるの教室」は、今後もぜひ継続していきたいですね。

「生きるの教室」は、これからのがん教育の模範

「生きるの教室」後援
第52回日本癌治療学会学術集会／
福島県立医科大学器官制御外科学講座
講師 中村 泉 先生



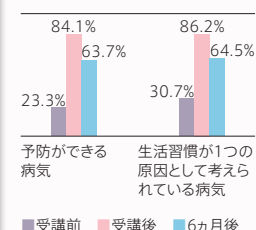
がん教育に対しては、ようやく国も動き出しましたが、誰がやるか、どこでやるかなど、まだまだ方法が確立していません。今、すでに活動をはじめているところも、患者会から立ち上げた地域もあれば、地域の行政が立ち上げたところなどさまざま、これから全国での実施をめざして、活動の立ち上げ方や進め方などを議論していく段階だと思います。

そんな中で国に先駆けてがん教育を実践しているのが「生きるの教室」です。これからは医師だけでなく、さらに教師や患者さんたちとのコラボレーションも求められるようになると思います。いずれにしても、まず、がんを知ることがとても重要なこと。「生きるの教室」はがん教育のひとつのモデルケースとして、今後も継続して全県で開催していただきたいものです。

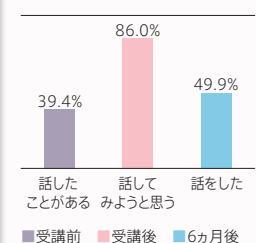
アンケート調査結果発表

受講後、がんに対するイメージが変化

「生きるの教室」を受講した1,106名の中学生を対象に昨年アンケートを実施したところ、受講前と受講後では、がんに対するイメージや理解、行動が大きく変化していることが判明した。



◎**がんに対するイメージ**
がんが「予防できる病気」だとイメージしている生徒は、受講前はわずか23.3%。しかし、受講直後は84.1%に上昇。6ヵ月後も63.7%を維持しており、がんに対するイメージの変化を示している。また、がんと生活習慣の関連性についても、受講後に高い伸びを示し、がんに対する正しい理解が定着している。



◎**がんについて、家族で話題にするきっかけを提供**
受講直後、がんについて家族と話してみようと思った生徒は、86.0%。6ヵ月後、実際に話をした生徒は、約半数の49.9%に上った。話をした内容は、がんの予防や予防法、がん検診やがんの早期発見について、だった。「生きるの教室」の授業が、生徒たちの家庭での行動にも変化をもたらしている。